

焼けた職場 社史に見る鹿児島大空襲

防空壕で業務をつなぐ

鹿児島信用金庫（鹿児島市）の前身、鹿児島信用組合は1945（昭和20）年、今の鹿児島市電・朝日通電停付近に本所、高見馬場、武町、武之橋に支所があった。6月17日の「鹿児島大空襲」で被災。その様子を書いた組合長の高牟礼清信（故人、敬称略）の日記が鹿児島信用金庫四十年史に残っている。

「18日午前3時半、組合事務所へ駆けつくべく自宅より洲崎小学校（現・城南小）付近まで行きしも火煙に阻止されて帰宅す。午前7時、事務所へ行ってみるに本所は全焼し、高見馬場、武町、武之橋各支所を巡視、之亦全焼

しいたり。日本銀行鹿児島支店長と打ち合わせ。3百万円の貯金非常払戻資金の融通方を申し入れて、承諾を得た」

鹿信組は仮事務所を本所近くの帝国銀行鹿児島支店（現・リッチモンドホテル鹿児島金生町付近）内に置き、翌19日には預金者への払い戻しに応じた。「職員の出足鈍し」と高牟礼は仲間の安否を気にしながら、専務や一部の職員と仕事をした。

7月27日には再度の大々的な爆撃を受けた。「本組合は8月1日、予ねて設備せる冷水町の横穴壕（防空壕）の前に15坪の



1964年頃
当時の鹿児島信用金庫本店外観



戦時中の貯金通帳
「火の玉貯金 大東亜戦争必勝祈念」と記される
（画像は一部加工してあります）

■ 現在の鹿児島信用金庫の本店前に並ぶ職員



信頼とを博する結果となった」と残る。

47年春、本店事務所を名山町（当時は六日町）の現在地に移転。高牟礼は支店網の拡大強化に乗り出す。営業地域を県全体に広げ、地方支店を次々と開設。年史には「県下の中小

企業者、勤労者並に一般大衆の便益を図らんとする試みは全国的に異例であったが、組合長は独自の見識と不退転の努力で実現していった」とある。

信用金庫法の施行に伴い、鹿信組は51年10月、鹿児島信用金庫として再出発。

3年後は柿本寺信用金庫を吸収合併して、県内に20支店、440人の職員を擁する大所帯となった。年史は「量的に九州一は勿論、全国でも有数の大信用金庫たる地歩を占めるに至った」とつづる。



イメージ